

機能するか二人体制

大統領は元首、大きな権限を持つ首相
四年後のプーチン氏返り咲きは微妙か

三月二日の大統領選でメドベージェフ第一副首相が当選し、「メドベージェフ大統領＋プーチン首相」体制になることはほぼ確実だ。この新体制をロシアでは「メドベージェフ・プーチン・タンドム」と呼んでいる。果たしてこのタンドム（二人組）はうまく機能するだろうか。

ロシア憲法によれば、大統領は国家元首としてロシアを代表し、内外政の基本方針を決定（第八〇条）、下院の同意を得て首相を任命し、首相の提案に基づいて、副首相と大臣を任命する（第八三条）。憲法上、大統領が首相に対して優位にあることは明白だ。

しかし、メドベージェフ氏は九一年六月にサンクトペテルブルク市の対外関係委員会（議長はプーチン）の法律専門官に就任して以来、プーチン氏の部下として働いてきた。プーチン大統領氏が大統領に就任してからは大統領府副長官、同長官、第一副首相を歴任してきた。だから、メドベージェフ大統領、プーチン首相となっても二人の立場が直ちに逆転することはないだろう。

それゆえこのタンドムは実際には次のようなものとなる。①メドベージェフ大統領が国家元首としてロシアを代表する。②メドベージェフ大統領が副首相と大臣を任命する場合、憲法第八三条の規定によりプーチン首相の提案に従うことになる。政府人事権はプーチン首相が握ることになる。③憲法第一一四条は、外交、安全保障、治安分野の施策を政府にゆだねている。メドベージェフ氏は安全保障や治安分野での経験がない。この分野はプーチン首相が担当することになる。

政府は巨大な官僚機構を持ち、巨額の予算を動かしている。それだけに首相の権限も大きい。それゆえメドベージェフ大統領のもとで、プーチン氏の政府、プーチン政権ができると考えてよいだろう。

その後はどうなるのか。四年後にプーチンが再び大統領になるのだろうか。しかし、政財界の実力者たちの年齢が驚くほど若いロシアで四年後に六〇歳となるプーチンが再び大統領になるかどうかは微妙だ。現在四二歳のメドベージェフ氏が大統領を一期しか務めないとこのも不自然だ。彼が二期八年務めれば、プーチン返り咲きの可能性さらに低くなるだろう。

プーチン氏がいわゆる院政を敷くのは彼が権力に固執しているからではなく、メドベージェフ氏では治安官僚（シロビキ）たちをうまくコントロールできないと考えてのことだ。コーカサス地域の安定やテロの脅威の低下とともにシロビキの影響力も徐々に弱まるだろう。そうなればプーチン院政の必要もなくなり、実際の権力移譲も可能となる。

メドベージェフはプーチン政権内ではソフトでリベラルという役回りを演じてきた。もうひとりの有力後継候補だったシロビキ出身のイワノフ第一副首相が強硬派と目されてきただけに、欧米にも安堵感が生じたことは事実だ。メドベージェフ氏は経済通でもあり、日露の経済関係もさらに緊密化することは間違いないであろう。

（『毎日新聞』二〇〇八年一月一日付朝刊第七面 上野俊彦）